

# しっかり者のすずの兵隊

DEN STANDHAFTIGE TINSOLDAT

ハンス・クリスティアン・アンデルセン Hans Christian Andersen

青空文庫



あるとき、二十五人すずの兵隊がありました。二十五人そろつてきようだいでした。なぜならみんなおなじ一本の古いすずのさじからうまれたからです。みんな銃剣をかついで、まつすぐにまえをにらめています。みんな赤と青の、それはすばらしい軍服を着ていました。ねかされていた箱のふたがあいて、この兵隊たちが、はじめてこの世の中できいたことばは、

「やあ、すずの兵隊だ。」ということでした。このことばを聞いたのはちいぢやな男の子で、いいながら、よろこんで手をたたいていました。ちようどこの子のお誕生日だったので、お祝にすずの兵隊をいただいたのでございます。

この子はさつそく兵隊をつくえの上にならべました。それはおたがい生きうつしににいていましたが、なかで、ひとりが少しちがつていました。その兵隊は一本足でした。こしらえるときいちばんおしまいになつたので、足一本だけすずがたりなくなつていました。でも、この兵隊は、ほかの二本足の兵隊同様、しっかりと、片足で立っていました。しかも、かわつたお話がこの一本足の兵隊にあつたのですよ。

兵隊のならんだつくえの上には、ほかにもたくさんおもちやがつていました、でもそのなかで、いちばん目をひいたのはポール紙でこしらえたきれいなお城でした。そのちいさなお窓からは、なかの広間がのぞけました。お城のまえには、二、三本木が立つ



ていて、みずうみのつもりのちいさな鏡をとりまいていました。ろうざいくのはくちようが、上でおよいでいて、そこに影をうつしていました。それはどれもみんなかわゆくできていましたが、でもそのなかで、いちばんかわいらしかったのは、ひらかれているお城の戸口のまんなかに立っているちいさいむすめでした。むすめはやはりボール紙を切りぬいたものでしたが、それこそすずしそうなモスリンのスカートをつけて、ちいさな細い青リボンを肩にゆいつけているのが、ちようど肩掛のようにみえました。リボンのまんなかには、その子の顔ぜんたいぐらいあるぴかぴかの金ぱくがついていました。このちいさなむすめは両腕をまえへのばしていました。それは踊ッ子だからです。それから片足をずい

ぶん高く上げているので、すずの兵隊には、その足のさきがまるでみえないくらいでした。それで、この子もやはり片足ないのだからとおもっていました。

「あの子はちようどおれのおかみさんにいいな。」と、兵隊はおもいました。「でも、身分がよすぎるかな。あのむすめはお城に住んでいるのに、おれはたったひとつの箱のなかに、しかも二十五人いっしょにほうりこまれているのだ。これではとてもせまくて、あの子に来てもらっても、いるところがありはしない。でも、どうかして近づきにだけはなりたいものだ。」

そこで兵隊は、つくえの上ののっているかぎタバコ箱のうしろへ、ごろりとあおむけにひっくりかえりました。そうしてそこか

らみると、かわいらしいむすめのすがたがらくに見えました。むすめは相かわらずひっくりかえりもせずに、片足でつり合いをとっていました。

やがて晩になると、ほかのすずの兵隊は、のこらず箱のなかへ入れられて、このうちの人たちもみんなねにいきました。さあ、それからがおもちやたちのあそび時間で、「訪問ごっこ」だの、

「戦争ごっこ」だの、「舞踏会」ぶとうかいだのがはじまるのです。すず

の兵隊たちは、箱のなかでがらがらいいだして、なかまにはいろいろとしましたが、ふたをあけることができませんでした。くるみ割はとんぼ返りをうちますし、せきひつ石筆はせきばん石盤の上をおもしろそうにかけまわりました。それはえらいさわぎになったので、とう



とうカナリヤマまでが目をさまして、いっしよにお話をはじめました。それがそつくり歌になっていました。ただいつまでも、じつとしてひとつ場所をうごかなかつたのは、一本足のすずの兵隊と、踊ツ子のむすめだけでした。むすめは片足のつまさきでまつすぐに立って、両手をまえにひろげていました。すると、兵隊もまげずに、片足でしつかりと立っていて、しかもちつともむすめから目をはなそうとしませんでした。

するうち、大時計が十二時を打ちました。

「ぱん。」いきなりかぎタバコ箱のふたがはね上がりました。

でもなかにはいつていたのは、かぎタバコではありません。それは黒い小鬼でした。そら、よくあるバネじかけのびつくり箱だ

つたのです。

「おいすずの兵隊、すこし目をほかへやれよ。」と、その小鬼こおにが  
いいました。

でも一本足の兵隊はきこえないふうをしていました。

「よしあしたまで待つてろ」と、小鬼はいいました。

さて明るる朝になつてこどもたちが起きてくると、一本足の兵隊は、窓のうえに立たされました。ところでそれは黒い小鬼のしわざであつたか、風が吹きこんで来たためであつたか、だしぬけに窓がばたんとあいて、一本足の兵隊は、三階からまつさかさまに下へおちました。どうもこれはひどいめにあうものです。兵隊は、片足をまつすぐに空にむけ、軍帽と銃剣を下にしたまま、敷し

石のあいだにはさまってしまいました。<sup>きいし</sup>

女中と男の子は、すぐとさがしにおりて来ました。けれども、つい足でふんづけるまでにしながらみつけることができませんでした。もし兵隊が大きな声で「ここですよ。」とどなったら、みつけたかも知れなかったのです。けれども兵隊は、軍服の手まえ、大きな声でよんだりなんかしてはみつともないとおもいました。

するうち雨が降りだしました。雨しずくがだんだん大きくなつて、とうとうほんとうのどしや降りになりました。雨が上がったとき、ふたり町のこどもがでて来ました。

「おい、ごらんよ。すずの兵隊がいるよ。舟にのせてやろう。」

と、そのひとりがいいました。そこでふたりは、新聞で紙のお舟をつくりました。そしてすずの兵隊をのせました。兵隊は新聞のお舟にのったまま、みぞのなかをながされていきました。ふたりのこどもはいっしょについてかけながら手をたたきました。やあ、たいへん。みぞのなかはなんてえらい波が立つのでしよう、流の早いといったらありません。なにしろ大雨のあとでした。紙の小舟は、上下にゆられて、ときどきくるくるはげしくまわりますと、すずの兵隊はさすがにふるえました。でも、やはりしつかりと立って、顔かおいろ色ひとつ変えず、銃剣肩に、まっすぐにまえをにらんでいました。

いきなりお舟は、長い下水げすいの橋の下へはいつていきました。そ

れで、箱のなかにはいつていたときと同様、まっ暗になりました。「いったい、おれはどこへいくのだ。」と、兵隊はおもいました。「そうだ、そうだ。これは小鬼こおにのやつののしわざなのだ。いやはや、なさない。あのかわいいむすめが、いっしょにのつていてくれるなら、この二倍もくらくても、ちつともこまりはしないのだが。」

こうおもっているとところへ、ふと下水げすいの橋の下に住む大きなどぶねずみがでて来ました。

「おい、通行証つうこうしょうはあるか。」と、ねずみはいいました。「通行証を出してみせろ。」

でも、すずの兵隊は、だんまりで、よけいしつかりと銃剣をか

ついでにきました。お舟はずんずん流れていきました。ねすみはあとから追いかけて来ました。

うツふ、ねすみはきいきい歯ぎしりして、わらくずや木切れに、どんなによびかけたことでしよう。「あいつをおさえろ。あいつをおさえろ。あいつは通行税ぜいをはらわれない。通行証もみせやしない。」

でも、流れはだんだんはげしくなりました。やがて橋がおしまいになると、すずの兵隊は、日の目を見ることができました。でもそれといっしょにごうツという音がきこえました。それはだいたんな人でもびつくりするところです。どうでしょう、ちようど橋がおしまいになったところへ、下水げすいが滝ほりわになって、大きな掘

割りに流れこんでいました。それは人間が滝におしながされるとおなじようなきけんなことになっていたのです。

でももうとまろうにもとまれないほど近くまで来ていました。

舟は、兵隊をのせたまま、押し流されました。すずの兵隊は、でも一生けんめいつぱりかえっていて、それこそまぶたひとつ動かしたとはいえません。お舟は三四ど、くるくるとまわって、舟べりまでいっぱい水がはいりました。もう沈むほかはありません。すずの兵隊は首まで水につかっています。お舟はだんだん深く深く沈んでいって、新聞紙はいよいよぐすぐすにくずれて来ました。もう水は兵隊のあたまをこしてしまいました。そのとき兵隊は、かわいらしい踊ツ子のことをおもいだして、もう二どとあう

こともできないとかんがえていました。すると兵隊の耳にこういう歌がきこえました。――

さよなら、さよなら、兵隊さん、

これでおまえもおしまいだ。

ちようどそのとき新聞紙がやぶれて、すずの兵隊は水のなかへ落ち込みました。――ところが、そのとたん、大きなおさかなが来て、ぱつくりのんでしまいました。

まあ、そのおさかなのおなかのなかの暗いこと。そこは下水の橋下よりももっとまっ暗でした。それになかのせま苦しいといっ



たらありません。でもすずの兵隊はしつかりと立って、銃剣肩につツぱりかえつていました。

おさかなはあつちこつちとおよぎまわりました。それはさんざん、めちやくちやに動きまわったあと、きゆうにしずかになりました。ふと、稲妻いなづまのようなものが、さしこんで来ました。かんかんあかるいひる中でした。たれかが大きな声で、

「やあ、すずの兵隊が。」といいました。

おさかなは、つかまえられて、魚市場へ売られて、買われて、台所へはこばれて、料理番の女中が大きなほうちようで、おなかをさいたのです。女中は、そのとき兵隊を両手でつかんでおへやへ持っていきますと、みんなは、おさかなのおなかの旅を

して来たためずらしい勇士をみたがつてさわいでいました。でもすずの兵隊はちつともとくいらしくはありませんでした。みんなは兵隊をつくえの上のにせました。すると——どうでしょう、世の中にはずいぶんな奇妙なことがあるものですね。すずの兵隊は、もといたそのへやへまたつれてこられたのです。兵隊はやはりせんの男の子にいました。おなじおもちゃがそのうえにのつていました。かわいい踊ツ子のいるきれいなお城もありました。むすめはやはり片足でからだをささえて、片足を空にむけていました。この子もやはりしっかり者のなかまなのでした。これがすっかりすずの兵隊のころをうごかしました。で、もう少しですずの涙をながすところでした。でも、そんなことは男のすることではあ

りません。兵隊はむすめをじつとみました。むすめも兵隊の顔をみました。けれどおたがいになんにもものはいいませんでした。

そのとき、ちいさい男の子のひとりが、すずの兵隊をつかんで、いきなりだんろのなかへなげこみました。どうしてこんなことになったのか、きつとかぎタバコの黒い小鬼こおにのしわざにちがいありません。

すずの兵隊はあかあかと光につつまれながら立っていました。そのうち、ひどいあつさを感じて来ました。でもこのあつさはほんとうの火であついのか、心臓のなかの血がもえるのであついのか、わかりませんでした。やがてからだの色はすっかりはげしてしまいました。でも、これも長旅のあいだでとれたのか、心のか

なしみのためにはげたのか、それもわかりません。兵隊は踊ツ子の顔をみました。むすめも兵隊を見返しました。そのうちからたがとろけていくようにおもいました。でも、やはり銃剣肩に、しっかり立っていました。そのとき出しぬけに戸がぼたんといいて、吹きこんだ風が踊ツ子をさらいますと、それはまるで空をとぶ魔ま女じょのようにふらふらと空をとびながら、だんろのなかの、ちやうど兵隊のいるところへ、まっしぐらにとびこんで来ました。とたんに、ぱあつとほのおが立って、むすめはきれいに焼けうせてしまいました。

するうち、すずの兵隊は、だんだんとろけて、ちいさなかたまりになりました。

そうして、あくる日女中が、灰をかきだしますと、兵隊はちいさなすずのハート形になっていました。けれども踊ツ子のほうは、金ばくだけがのこって、それは炭のようにまっくろにこげていました。









# 青空文庫情報

底本：「新訳アンデルセン童話集第一巻」同和春秋社

1955（昭和30）年7月20日初版発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

入力：大久保ゆう

校正：秋鹿

2006年1月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# しっかり者のすずの兵隊

## DEN STANDHAFTIGE TINSOLDAT

2020年 7月13日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫  
著者 ハンス・クリスティアン・アンデルセン Hans Christian Andersen  
URL <http://www.aozora.gr.jp/>  
E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)  
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU  
URL <http://aozora.xisang.top/>  
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

#### Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>